

# ギャラリー展示における仕掛け

京都町家の水場に写真を沈めるインスタレーションについて

## Shikake In The Gallery Exhibition

The Installation Where The Photo Is Submerged In The Water Place Of The  
Townhouse In Kyoto

中山由基<sup>1</sup>, 中川一步<sup>1</sup>, 山崎怜菜<sup>1</sup>, 前田豪<sup>1</sup>, 村松秀<sup>1\*</sup>

Yuki Nakayama<sup>1</sup>, Ayumu Nakagawa<sup>1</sup>, Reina Yamazaki<sup>1</sup>, Go Maeda<sup>1</sup>, Shu Muramatsu<sup>1\*</sup>

<sup>1</sup> 近畿大学総合社会学部

<sup>1</sup> Faculty of Applied Sociology, Kindai University

**Abstract:** 京都の町家を改装したギャラリーを活用した、総合地球環境学研究所（以下、地球研）の研究内容を伝える展示「地球研ミュージアゴラ『地球がささやく 地球にささやく』」（ミュージアゴラとは「展示対話空間」の意、2023年9月開催）について、地球研より企画協力を依頼され、タイトル含め企画の大半の立案・制作・運営を担当した。その中で、町家内の井戸水が常時あふれる水場に、地球研のプロジェクトと関連した、半乾燥地にまつわる一枚の写真を沈める、という仕掛けを施した。水の有難みに気づいてもらうことがその目的である。来場者へのアンケート調査から間接的に推測すると、仕掛けにはたしかに効果があったであろうことが示唆される。こうしたアートの文脈における仕掛けの目的は、感動や気づき、新たな視点の獲得といった、より観念的なものになることが想定され、人々の心を動かす「コトづくり」とも親和性が高いものである。今後は「コトづくり」ともリンクさせながら、アートの文脈での仕掛けへの挑戦と探究を進めていきたい。

## 1 はじめに：「コトづくり」とは

近畿大学・村松秀ゼミでは、「コトづくり」のプロデュースをテーマに掲げ、さまざまな実践研究に取り組んでいる。コトづくりの「コト」とは、人々の心を動かしたり、豊かにしたり、幸せにしたり、問題だと感じてもらったりすること、と意味づけており、人々の暮らしを便利にする「モノづくり」と対比して、人の心がどう動くのかに重きを置いた「コト」を生み出すプロデュースを実践しようとしている。筆者のうち村松は前職でテレビ番組制作を生業としてきたが、それは映像を通じて視聴者の心を動かし心を豊かにする、まさにコトづくりの代表格で

ある。そうした手法は映像制作のみならず、例えばイベントやフェスティバル、SNS投稿、企業との協働なども含め様々なエリアへ拡大することが可能と考え、そうした多様な場で人々の心を動かす「コト」をどうやったら生み出していけるか、チャレンジを続けている。

## 2 「地球研ミュージアゴラ」の取り組み

京都にある大学共同利用機関法人人間文化研究機構・総合地球環境学研究所（所長・山極壽一、以下地球研と記す）は、研究内容をより広く人々に知ってもらおうと様々な広報活動を行う中で、私たちが行ってきたコトづくりに関心を示してくださり、実際にいくつかの依頼をいただいた。まず、地球研のゆるキャラ「地球犬」を活用した子ども向けのSDGsステージショーを企画・実施（2022年11月）し[1]、

---

\*連絡先：近畿大学 総合社会学部 社会・マスメディア系専攻  
〒577-0818 大阪府東大阪市小若江3-4-1  
E-mail: muramatsu\_shu@socio.kindai.ac.jp

次に、建物の中に小さな「里山」を創り出した展示体験イベント（2023年2月）を実施した[2].

そして3つ目の協働として、地球研主催による「地球研ミュージアゴラ」[3]の企画立案・運営・実施への協力を依頼された。「ミュージアゴラ」とは、地球研広報室の岡田小枝子室長が作った造語で、ミュージアムとアゴラを掛け合わせた言葉であり、「展示対話空間」を意味する。ギリシャ時代に市民が集い自由に議論していた広場「アゴラ」のように、ミュージアムでも展示を通じ対話が生まれるはずである、という仮説に則ったものである。

京都の中心部、烏丸御池にあるかつて町家だった建物（国の登録文化財に指定に指定されている）をギャラリーとして使えるようにした「しまだいギャラリー」を1週間ほど借り、地球研の研究内容について「展示から対話が生まれる」ようにしてほしい、というのが地球研側からの依頼だった。展示の期間は2023年9月8日～13日で、依頼をいただいたのが2023年6月と、本番まで3カ月の短い準備期間でなんとか作り上げた。



写真1: 「地球研ミュージアゴラ」展示時のしまだいギャラリー外観（2023年9月）

ギャラリー展示には、企画のコンセプトが必須となる。そこで、「地球がささやく 地球にささやく」というタイトルを決めた。地球は私たちにはすぐにはわからないようなささやきをたくさんしていて、それらを必死に読み取ると環境や世界の状況などが見えてくる。地球研の研究は世界各地でそうした地球の「ささやき」を読み取ることであったと考えた。さらには、地球のために私たちはこうしていくべきだという地球への「ささやき」も進めているはずである。

しまだいギャラリーの東側の展示空間は、広い土間と蔵、そして小上がりの部屋から成り立っている。その空間をテーマごとに4つのエリアに区切り、入

り口を入れてすぐのところを「水がささやく」、その奥の蔵を「音がささやく」、土間の一番広いエリアを「共にささやく」、奥の小上がりを「地球にささやく」とした（図1）。

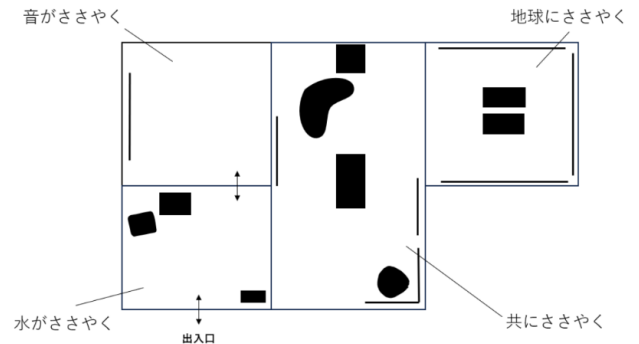


図1: ギャラリー展示 会場構成図

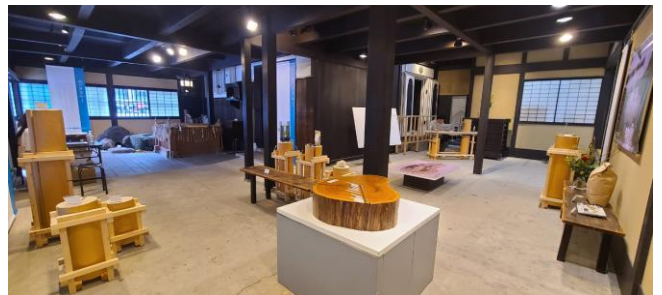


写真2: 「地球研ミュージアゴラ 『地球がささやく 地球にささやく』」展示会場 内観

これらのうち「地球がささやく」の制作は地球研広報室にお任せし、それ以外の3つのエリアについて展示の内容を具体的に考案し企画制作、運営を行った。

今回はこの中で、最初のエリアである「水がささやく」における仕掛けについて紹介したい。

### 3 「水がささやく」での仕掛け

「水がささやく」のエリアにはもともと、井戸の水場があり、これがこの空間にきわめて強い印象をもたらしている（写真3）。この井戸は、室町時代に掘られ、それからずっと水が湧いているそうである。

しまだいギャラリーは以前は酒問屋を営んでいたこともあり、水との縁が深い。また京都に限らず、日本の町家ではかつてはこのように屋内に井戸があることも普通であった。



写真3: 室町時代から湧いているという水場と井戸

この水場は、「豊かな水の国」ニッポンを象徴しているとも言える。これを展示の中にうまく取り込みたいと考えた。

いっぽう、地球研にはさまざまな研究プロジェクトがあり、すでに終わったものも含めおよそ50のプロジェクトが存在し、地球全体をフィールドにして様々な研究がなされている。その中に「砂漠化をめぐる風と水と土」（通称：砂漠化プロジェクト、2016年終了）[4]というのがあり、過去のアーカイブを調べる中で、プロジェクトの研究者が研究フィールドにしているインドで撮影した一枚の写真を見つけた（写真4）。



写真4: 「ヤギと少女」（撮影 遠藤仁）

「ヤギと少女」と題されたこの写真には、砂漠化地帯を10頭近いヤギとともに歩くひとりの少女の後ろ姿が写っている。砂漠化の暮らしはこういうものだ、というのは端的にわかるように感じられる。

いっぽうで、＜砂漠化＞がいったいどんなことを引き起こしているのか、そもそも水は地球上でどれくらい貴重なのか、といった深い課題へ思考を馳せうる写真かという、この写真をお見せするだけではなかなかピンときにくいかもしれない。

いっぽうで、＜砂漠化＞がいったいどんなことを引き起こしているのか、そもそも水は地球上でどれくらい貴重なのか、といった深い課題へ思考を馳せうる写真かという、この写真をお見せするだけではなかなかピンときにくいかもしれない。

そこで、仕掛けを施すこととした。

水場には常に、井戸水があふれている。その中に、上記の写真を沈めてみることにした。あふれる水の波紋で、写真が具体的に見えるか見えないか、ギリギリぐらいになるように設定した（写真5,6）。

来場者は水場を見ると、なんとなく覗き込みたくなるものである。手前に踏み石もあることから、そうした行動をしやすい環境がある。さらにそこに、何かが入っている事に気づく。それが写真かどうかも含め、具体的にはわからず、あれはいったいなんだろう、と思い、つい覗き込んでしまう。覗き込んでも、しばらくは写真かどうか分らず、ゆらゆらとした水面を凝視し続け、それが写真だと気づいても、なかなかその内容が把握できない。そしてはたと、これは砂漠を歩く少女なのでは、と気づくのである。



写真5: 水場に沈めた写真の様子1

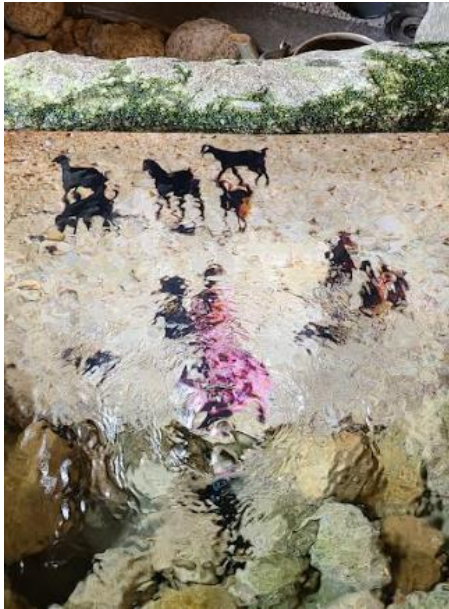


写真 6: 水場に沈めた写真の様子 2

日本人にとっては、暮らしの中には常に井戸水や水道水が湧き続け、豊富な水で生活が満たされていることは当たり前のことであり、その有難さに気づくこともなかなかない。それとは対照的に、写真の世界の少女にとっての当たり前は、水は湧いてくるものではなくわざわざ採りに行くもの、ということである。日々の水を確保するのもおぼつかない暮らしをしているはずである。

ユニセフの調査によれば、いま世界中で安全な飲み水を手に入れられない人々は 20 億人もいる[5]という。そのことを知ると、私たちがいかに水に恵まれているのか、強く実感するであろう。

「水場に砂漠化の写真を沈めておく」、というささやかな仕掛けによって、人間が文明的な暮らしを送っていくためには水が必要であり、そうした「水の有難さ」に思いを馳せることを来場者に促すことを想定したインスタレーション展示である。

松村によれば、「仕掛け」とは「公平性」「誘引性」「目的の二重性」の 3 つの要件 (FAD 要件) をすべて満たしたものであり、それによって行動変容を促すものである[6]。今回の仕掛けは、これら 3 要件をすべて満たしていると考えられる。

なお会場ではゼミ生が案内役を務め、来場者には特に予備的な情報をほとんど開示せず、まず考えてもらうようにし、写真の詳細までわかったあたりで情報をお伝えするようにしていった。写真を沈めておく、という仕掛けによって来場者の思考に変化が生じたタイミングで、はじめて情報をインプットしていくのである。これによって「コトづくり」でも

っとも大事にしている「心が動く」ことが一番効果的に実現すると考えたからである。またそれによって来場者との深い対話生まれ、展示対話空間として機能することも狙った。また一部情報は壁の説明書きやパンフレットにも記載し、参照できるようにした。

## 4 結果・考察

今回のギャラリー展示の来場者の反応については、地球研ミュージアゴラ：展示対話空間という位置づけから、仕掛けそのものの効果について直接的な計測ができたわけではない。

ただ、来場者全体のアンケート調査をもとに、その仕掛けの効果を間接的に捉えてみたい。

まず、ギャラリー展示全体に対する評価は、「とてもよかった」70.9%、「よかった」25.6%と、96%強の来場者が評価してくれた(有効回答数 101)。

また「4つの空間のうちもっとも印象に残ったのはどれか?」という質問に対しては、「水がささやく」と答えた人が 28.6%と、4つの中でももっとも多かった(図 2)。

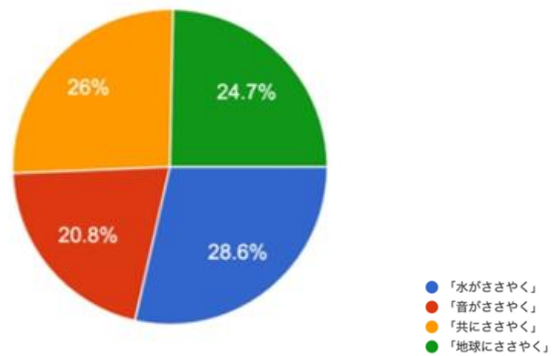


図 2: 来場者アンケートより「4つの空間のうちもっとも印象に残ったのはどれか?」結果(有効回答数 77)

また、来場者の方々のアンケート中のさまざまな記述の中にも、水場の展示について言及しているものもいくつも見られる。例えば、以下のようなものである。

- ・『「節水しないと」』ともっと強く思いました。「水がささやく」井戸の写真が印象的でした」
- ・『「水がささやく」』のテーマに合わせた案内、水の向こうに見える歴史や時代、文化と今が見えてきた」

- ・「いつまでもおいしい水が飲めますように」
- ・「水と人のつながりについて（伝えたい）」
- ・「子どもや孫に話して、水の大切さについて（伝えたい）」

こうした反応から考えると、今回の仕掛けの効果はあったであろうことが示唆される。

ただし、直後の声かけやパンフレットなどの効果や、ギャラリー展示全体で「地球のささやき」に思いを馳せていただいたことなど、さまざまな要因も加味してのものだとも考えられ、今回の仕掛けそのものにどこまで効果があったのかは明確ではない。今後似たような展示を構築する機会があれば、ぜひこうした仕掛けの手法自体の効果測定できるようにしていきたい。

## 5 アートの文脈での「仕掛け」と

### 「コトづくり」

今回の「水場に砂漠の写真を沈める」という仕掛けは、ギャラリー展示の中のひとつ、という位置づけであることも踏まえると、「アート」としての文脈が強い。ある種のインスタレーションと見ることもできるであろう。

そもそも、壁にかかった絵を観るような展覧会は別として、現代アートの文脈にあるものの多くは、どうやって来場者を惹きつけられるか、仕掛け的な観点が施されていることも多いだろう。

今回の地球研とのギャラリー展示でも、写真2のように、なぜか土間にはさまざまな木の切り株が置かれ、年輪を見ることができ、また年輪のような顕微鏡写真が床につくように置かれている。そのしつらえ自体が、「これはいったいどういうことなのだろう？」という思考を生み出させ、展示の世界へと惹き込むようになっているひとつの仕掛けとも言えよう。こうした空間のあり方はアートの世界ではごくふつうのことで、自然にその世界へいざなうような仕掛け的な要素があるものである。

では、アートの文脈の仕掛けの場合、「目的」は何になるのだろうか。例えば、ゴミ箱の上のバスケットゴールは、「ゴミを散逸させずにゴミ箱に入れる」というある意味で物理的な目的が明確に存在している。

今回の「水場に砂漠化の写真を沈める」仕掛けの場合、目的は「水の有難みに気づく」といった抽象的な視点や観点、といったようなものだ。アートのインスタレーションなどでも、得られるものは「全

く想像していなかった感動や気づきとの出会い」といったことが大きいと言える。

感動を得られる、幸せになる、心が動かされる、といった、情動を介して新たな視点や観点、世界へのまなざしを得ることがアートの文脈での仕掛けの目的なのだとすると、それは1.でも述べたような「コトづくり」が目指すところとまさに合致する。的確な仕掛けを施すことによって人々の心が動き、コトづくりが生まれていくことになるわけで、仕掛けとコトづくりはとても親和性が高いと考えられる。その際、物理的な目的というよりも、抽象度が高くより観念的な感動や新たな視点といったものを得ることが目的となるのが、従来の仕掛けとの違いとも言えるだろう。

また、昨年の仕掛学研究会にて発表した「番組タイトルで、仕掛ける。」[7]で述べたような、すぐに目的を達する仕掛けの「即効性」ではなく、じんわりと時間をかけながら効果を生み出していく、仕掛けの「遅効性」が、ギャラリー展示やアート系の展示でも起こりうるだろう。一つの作品を見るだけでなく、展示空間全体を回り、感じ、体感することで個々の動きが生まれてくることも多い。

今後にもこのように、アートの文脈から仕掛けを捉え、実際に仕掛けをほどこし、考察していくことを、「コトづくり」とリンクさせながらぜひ探究していきたいと考えている。

### 謝辞

ギャラリー展示「地球研ミューザゴラ」の企画制作の機会をくださった総合地球環境学研究所の岡田小枝子様はじめ皆様には、多大なご高配をいただきましたこと、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

またギャラリー展示の来場者の皆様、展示制作ご協力くださったすべての皆様、運営を手伝ってくれた村松ゼミ生に、心よりの感謝の念を申し上げます。

### 参考文献

- [1] NEWSCAST. ニュース2022年11月2日: 近畿大学総合社会学部村松ゼミと総合地球環境学研究所がゆるキャラ「地球犬」が活躍するSDGsステージショーを開催。(2022)  
<https://newscast.jp/news/0810557>
- [2] NEWSCAST. ニュース2023年1月31日: 科博連サイエンスフェスティバルにイベントブース『そうだ、里山を知ろう。』を出展～近畿大学総合社会学部 村

松ゼミとの共同～.(2023)

<https://newscast.jp/news/0077486>

- [3] 総合地球環境学研究所 HP: 地球研ミューザゴラ（展示対話空間）「地球がささやく 地球にささやく」  
<https://www.chikyu.ac.jp/rihn/events/detail/111/>
- [4] 総合地球環境学研究所 HP: 砂漠化プロジェクト  
<https://www.chikyu.ac.jp/rihn/activities/project/detail/37/>
- [5] ユニセフ HP. ニュース 2023 年 3 月 20 日: 3 月 22 日は『世界水の日』気候変動や紛争で悪化の一途をたどる水の危機 46 年ぶりに国連水会議も開催.(2023)  
<https://www.unicef.or.jp/news/2023/0048.html>
- [6] 松村真宏：仕掛学，東洋経済新報社（2016）
- [7] 村松秀：番組タイトルで、仕掛ける。，第 13 回仕掛学研究会（2023）